刑部家の焼き物が今に伝える史実

～明治 33 年 (1900) パリ万博に出品された有田焼～

白川の窯焼き・久保時太郎家に残されていた図案。右側に「佛國博覧会佐賀縣陶磁器出品協会印」が押印されている。

隣国・中国では上海万博が開催されていますが、もう行って来たという方もいらっしゃるのではないでしょうか。今回の万博のテーマは「より良い都市、より良い生活」だそうです。

今から 110 年前の 1900 年、和暦では明治 33 年、フランス・パリで開催された万博のテーマは「過去を振り返り 20 世紀を展望する」でした。

『肥前陶磁史考』に依ると、このパリ万博に出品するため有田の陶業者は多額の地方費補助を仰ぎ、佐賀県陶磁器出品協会 (会長：武内維績佐賀県知事) の本部を有田に置くことになりました。

出品協会では当時、愛知県技師であった納富介次郎を技師長に、絵画には東京の荒木探令 (ワグネルが創始した旭焼の陶画者、後年狩野氏を襲名)、金沢の和田重太郎 (石川県山代の人、絵画及び図案に長じていた)、彫刻には山口の寺内信一 (イタリア人彫刻家ラグーザの門下生)、図案には徳見知敬 (納富介次郎門人) 等を招へいし、各出品者の指導を行ない、各技師は出品作品の陶家を巡回督励したとあります。

このように県と町をあげての指導督励により、33 の業者が出品しました。会期は 4 月 15 日～ 11 月 5 日までの約 7 ヵ月間。

また、この折の万博には深川製磁の深川忠次が佐賀県出品者総代として渡欧することになり、同年 3 月 5 日、長崎港出帆のフランス国郵船に乗り込みました。その滞在は翌年 3 月まで続き、この間、フランスのリモージュは勿論、ドイツやイギリスなどの陶業地を熱心に調査しています。

過日、東京都渋谷区在住の刑部久子さんより、この万博の折、製作したと思われる製品を寄贈したいという電話での申し込みがあり、製品が届くのを楽しみにしていました。

このほど刑部家より寄贈された製品

刑部家は白川にあった窯焼き・久保時太郎家の子孫で、久保家は幕末から明治にかけて、下白川の登り窯で製品を焼いていました。数年前、白川の屋敷が老朽化し取り壊すということになり、家の中にあった書類や輪島塗碗の日常用具など大量に寄贈していただきました。その中に、明治 33 年のパリで開催された世界万国博覧会に出品された折の図案がありました。また、東京の刑部家にはその図案に基づいて製作された蓋物の焼き物が所蔵されており、同家では図案と製品が一致する資料でもあり、ぜひ有田町で保存・活用してほしいと、今回、寄贈の運びとなりました。

この作品がフランスへ運ばれたのか、予備のために同じ製品を作ったのかはよく分かりませんが、当時、どのような製品を有田で焼成し、世界に売り出そうとしていたのかなどの事柄を今に伝える貴重な資料であることは間違いありません。　（尾﨑葉子）

パリで開催された万博は慶応 3 年に始まり、その後、明治 11 年、同 21 年、同 33 年と続きました。他の万博に関する資料は「海外博物館本邦参同史料」(博覧会倶楽部発行) や、「有田町史　陶業編Ⅱ、通史編」にもあります。

季刊 皿山 No.87 秋 2010

有田町歴史民俗資料館・館報

平成 22 年度企画展

『海揚がりの肥前陶磁』

～海に残された有田焼～

期間：平成 22 年 10 月 1 日㈮～ 11 月 30 日㈫

江戸時代、有田焼は船で運ばれていて、多くの船が各地で沈没しました。そのため、有田焼は全国の海で発見されています。今回の企画展では全国の海に沈んだ有田焼など肥前の陶磁器を一堂に集めて、船で運ばれた証を確認してみたいと思います。

■有田焼を運んだ船

今回の企画展では、陶磁器の他に船の模型と錨を展示いたします。船の模型は福岡県朝倉市の豊山神社（豊前坊）に芦屋町の刀根家が奉納した船雛形を復元したものです（写真１）。芦屋と言えば、有田焼を扱った筑前商人の本拠地の一つでした。この模型のような船が多数、伊万里港に来航して、有田焼を全国に積み出していました。

錨は石川県珠洲市姫島付近の海底で発見され、引き揚げられたものです（写真２）。江戸～明治時代の鉄製の四つ爪錨です。当時、盛んにこの海域を往来していた北前船が積んでいたものと思われます。

■海路や港に沈んだ陶磁器

次に海路による運搬途中に沈んだ陶磁器、港に沈んだ陶磁器を海域毎に主なものを紹介します。

□日本海

北海道の北前船の寄港地の海底から数多くの有田焼などが発見されています。例えば上ノ国や江差の港の海底では、中世末～近世初頭の唐津焼から明治の型紙摺り陶磁器まで数多く発見されています。古くから盛んに交易が行われていたことを物語っています。また、石川県舳倉島沖から引き揚げられた染付皿も日本海交易の証拠です（写真３）。領海外の水深推定 800m の海底で、カニ籠漁の籠に偶然かかって引き揚げられたものです。これまでで最も水深が深いところで発見されている有田焼です。

□太平洋

江戸時代、江戸と大坂を結ぶ海路は、当時の物流の大動脈でした。大坂から江戸へ廻船が多くの物資を運んでいました。神津島沖で発見された沈没船もその一つで、石硯、堺の擂鉢とともに肥前の陶磁器が発見されています。

写真１　刀根家奉納船雛形の復元模型（芦屋町歴史民俗資料館所蔵）　寛延２年 (1749) に芦屋津の刀根家が奉納した船雛形の復元模型です。

写真２　鉄製四つ爪錨（九千房信雄氏所蔵）
石川県珠洲市姫島付近の海底で発見されたものです。

写真３　舳倉島沖引き揚げ染付皿（黒部市教育委員会所蔵）
カニ籠漁の籠に偶然かかって引き揚げられたものです。

□瀬戸内海

有田などの生産地と大坂を結ぶ瀬戸内海も有田焼が盛んに運ばれた海です。例えば山口県下荷内島沖では、約 3,000 点の肥前の陶磁器が海底から引き揚げられています。ただし、そのほとんどが売り捌かれてしまい、今回はわずかに残されている陶磁器を展示いたします。

□九州近海

生産地に近い九州近海でも多くの陶磁器が発見されています。昨年の企画展でもご紹介した福岡県岡垣浜の採集陶磁器や芦屋沖海底遺跡の他に、唐津焼が大量に発見された玄界島海底遺跡、元寇の島として知られる長崎県鷹島海底遺跡、嬉野や塩田など塩田川流域の窯場の製品が数多く発見されている長崎県茂木港外遺跡（写真４）などが知られています。

そして、今回の展示品の中で最も南の海岸に打ち上げられた陶磁器が、鹿児島県の吹上浜採集陶磁器です。1660 年代ごろに東南アジアに向けて運ばれる途中に沈んだ陶磁器です。ベトナム、タイ、インドネシアなどで同じ種類のものが数多く見つかっています。

今回は展示することはできませんが、有田焼は海外へも船で運ばれていますから、台湾、シンガポール、インドネシア、スリランカ、ケープタウン、スウェーデンなど世界の海でも有田焼は見つかっています。

■幕末の軍艦と有田焼

海に沈んだ有田焼は積荷ばかりではありません。今年は、NHK の大河ドラマの影響で、坂本龍馬が大ブームとなっていますが、今回の企画展では坂本龍馬の「いろは丸」で発見された有田焼も展示いたします。いろは丸は龍馬の海援隊の用船で、1867 年に紀州藩の船と衝突して沈没した蒸気船です。龍馬ら乗組員のぬくもりは残されていませんが、確かに彼らとともにあった器です。

写真４　茂木港外遺跡海底写真
長崎市茂木港沖合の水深 15m の海底下から約 100 点の陶磁器が発見されました。

写真５　復元開陽丸　（開陽丸青少年センター）
戊辰戦争の終末期、開陽丸は旧幕府軍の艦隊の旗艦でした。

一方、いろは丸沈没の翌 1868 年、北海道の江差沖で座礁して沈没した開陽丸で発見された有田焼も展示します。この軍艦は、明治新政府に抵抗して江戸を脱出した榎本武揚率いる旧幕府軍の艦隊の旗艦でした（写真５）。榎本や新撰組の副長であった土方歳三らにとっては、頼みの綱であり、制海権の鍵を握る幕府最強の軍艦でした。この軍艦が座礁せずに明治新政府軍との戦争に参加できていたら、歴史の行方もほんの少しずれていたかもしれません。記録には残りませんが、いろいろな歴史の場面に有田焼は立ち会っているようです。

そして、有田町歴史民俗資料館に隣接する有田焼参考館では、岡垣浜で 30 年間かけて採集された添田征止さんのコレクションを展示いたします。昨年の企画展では主に完形品をお借りしましたが、今回はコレクションの主体となっている大量の破片を展示いたします。4 トントラックで福岡県岡垣町のご自宅の庭から当館に運び込んだものです。実際に手に触れて、陶片に親しんでいただける趣向を考案中です。

今回の企画展は、例年よりも長く開催いたします。是非、一度足をお運びくださり、波涛を越えて運ばれていた往時の有田焼の海路に思いを馳せていただければと思います。　（野上　建紀）

平成 22 年度企画展
「海揚がりの肥前陶磁」展

主催：有田町歴史民俗資料館
共催：アジア水中考古学研究所
助成：海と船の博物館ネットワーク

期間：平成 22 年 10 月 1 日㈮～ 11 月 30 日㈫

場所：有田町歴史民俗資料館
開館時間：9:00 ～ 16:30（会期中無休）
入館料：無料

第10回 有田の町屋模型作り教室開催

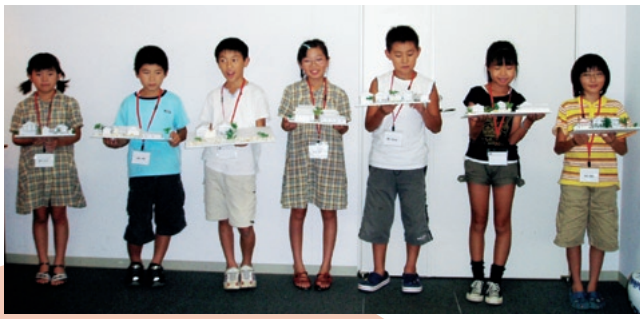
8月16日(月)～17日(火)の2日間にわたって、町内各小学校の5，6年生を対象に町屋の模型教室を開催しました。

平成12年から始めたこの教室も、今回で10回目となりました。

毎回、どういう形で模型を作ると町並みが再現できるか、また未来へ残したい町を子供たちに表現してもらえるかと、館員も試行錯誤しながら実施してきました。

今回も町並み保存の担当者から有田町の町並みの特徴や現況の説明を受け、作業に入りました。両町合併後は曲川小・大山小からも参加してくれる子供たちもいて賑やかです。

スチレンボードに図面を張り、それに沿ってカッターで切り取り、のりやボンドで組み立てていく作業を行いましたが、色を付けていくとさまざまな町屋が完成しました。



参加者のみなさん

有田中部小学校	5年生	太田修作　くん
		金子さくらさん
	3年生	金子あさひさん
曲川小学校	5年生	村山陽菜　さん
		並江孝太郎くん
大山小学校	5年生	吉村真野子さん
		坂井太郎　くん

新 寄贈資料紹介

このほど新たに下記の方々より資料を寄贈していただきました。大切に保存し活用させていただきたいと思います。ありがとうございました。

【木製看板】　泉山　篠原恵美子様

表　裏

第二次世界大戦当時、有田で陶貨を生産した折、大蔵省の造幣局出張所が設置され、この看板が掲げられました。一面に「造幣局有田出張所」、その裏面には「造幣局監理工場」の文字が書かれています。

【色絵徳利・盃】　大樽　田中直良様

以前、館報No.80で紹介した製品と同様のもので、昭和3年ごろ香蘭社十代深川栄左衛門氏が世界各地の窯業地などを視察した折、帰朝記念として関係者へ贈られたものです。

【賞状】　泉山　高本瑠璃子様

これも館報No.85に昭和7年国道拡幅工事竣工記念の染付鉢を紹介しましたが、その図案に応募し一等賞を受賞した、当時有田公民学校本科後期2年生の田中小初さんに贈られたものです。

【染付火鉢・傘立て】

本幸平　　岸川眞里子様

岸川さんの先祖は「山本火鉢」と称された窯元で、荒物(大物)作りを得意とした窯焼きでした。その製品2点です。

季　刊　『皿　山』

通巻87号（平成22年9月1日）

編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185